【翻　訳】

ハーマン・メルヴィル詩集『ジョン・マー』より抄訳

大　島　由起子

ネッドに

俺らがよ、彷徨いしあそこはどこ行っちまった、ネッド・バン。
　陰影深き窪地はよ
ポール・プライが〈金銭〉や〈交易〉もたらすまでは捨て置かれ
　おかげで航海者に壊されなかった世界はよ。
馴染みには、どこだか見当がつくってもんだ
なにしろ、若いもんにゃ行けぬ秘境をうろついた俺たちだから。

満ち足りしかの日々、まざまざと蘇る
　ありきたりの行楽にゃ飽きちまって
快楽道を究めようって奴は、俺たちの〈汎神的な〉港に
逃げて来なくちゃなあ、ネッド。―
マルケサス、渓谷の島々は
〈異教〉の海に浮かびし正真正銘のエデンだったさ。

なあネッド、見たこともない光景がひきつけ、
伝説が誰をもそこに逃走させるはず―
　『真夏の夜の夢』にだって出てこない
　生まれながらの怠け者のタイピーは
人は農耕をさせられようとも
人生ってもんはシリアへのくそ真面目な巡礼なんかじゃないって感じてる。

なあ、今時（いまどき）の旅行者に見つけられようか
　何年たとうが俺たちの心に宿る
　かくも紫に煌きしかの島を―
　なあネッド、遥けき昔だったよな！
やれやれ、アダム殿が賢げな足取りでお進みだが、

お宅の辿る道にゃ、ちょいと紫が足りないぜ。

それにしたって、碇泊当直なんてのどかなもんで、
　俺たちは先住民みたく、エデンが壊される前の
霊魂ゆるやかなりし、
　原初の薫りに耽って思う。
死は必定なれど、この世とあの世とで
楽園に二度入港できようとは、ありがたやって。

トム・デッドライト
（1810年）

　地中海からの帰り、嵐の夜のイギリス戦艦ドレッドノート98号にてのこと、二船長のうち白髪混じりの方が、甲板に砲身あたりでハンモックに揺られつつ、いまわの時を迎えていた。かの老下級将校は精神状態怪しくなるかと思うと正気を取り戻した。我に返っても心はまたあらぬところを彷徨い、惜別の歌を途切れ途切れに口にしつつ食事仲間二人に指示を出した。熱っぽく、付き添いに扇がれていた。口にする名前や言い回しが怪しげになり、断片的で意味不明のことも口走りはしたものの、短くともまともな言葉も続けざまに発することもあった。自分なりにリズムをとって、なじみの舟歌を口ずさんだ。いかれかかっていようとも、奇抜な考えの最後のたなびきらしく、はっきり朗々と鼻歌のように、伸ばし伸ばし歌った。

さらばよ、さらば、尊く健な方々よ—
　　さようなら、さようなら、スペインの淑女たち、
この度、私めはデッドマン岬まで船出を命じられ、
　　あなた方に見（まみ）えたく、立派な船にて参上候。

いいかお前ら、わしが大檣中檣帆を逆帆にさせて止めさせた、
　　わしが船を止めたのさ、じっくり水深を測りたかった—
黒いちぎれ雲が飛んでるな。神の恵みで、ええい、くそ、
　　わしゃデッドマン岬まで英仏海峡を死出の舵を取っておる。

〈無風帯〉じゃ、はらはらしっぱなし、
　〈海藻〉に絡まれて呻たっけ—
霧で小船に気付かぬ低落ぶりで—
　彷徨えるオランダ人—軽いお辞儀を—喜望峰沖で！

それにしてもマットよ、頬に感じる風は何だい。
　白いゴーニーの翼かい―すいすい来たもんだ！―もうアガラス岬とは！
わしのもんは食事仲間のジョックに進呈しよう。わしゃ身寄りとてない身だからな。
　聖なるジョーの奴には喪章などよすよう言っとくれ。

ジョーがのたまってた推測航法で航(い)くのはよしとけよ。
　マットよ、夜空の灯は今晩も見えん。
推測航法など死出の旅にならいいだろうがな。
　そろそろトム・デッドライト様もご臨終って感じだぜ。

信号旗だ！―英海峡艦隊の停泊を知らせろ、たなびかせろ。
　船長たち―トランペットを吹け―ごった返しだ！
最高速度ですっ飛ばすぞ、自分の工具は片付けろ、
　〈主であられる大提督殿〉がうさんくさげに御照覧だ！

マットよ、わしが寝返りを打つ前に、ちょい酒をくれんかい。
　ジョック、お前の手(ひれ)を握らせてくれ、よし、いいぞ。
いいかお前ら、わしが逝ったら口に煙草を入れとくれ、
　竜骨見せちまっても、新米みたいに泣くんじゃないぞ。

うらやましき島々
（「ラモン」より）

命からがら辿り着いてみりゃ、およそ嵐とは無縁のところ。
　遠目にゃ陰気そうだったが、
どっこい、緑なす。海に囲まれ、
　雷低く、霧に虹が立つ。

島の低き山々まどろみて
〈神の休戦〉さ――
上にゃ、気が遠くなりそうな靄かかり
　椰子がわさっと恋人の糸杉にご挨拶
谷底の小川じゃ小石たち呟き
　喜びも悲しみも歌ってあやす。

沼沢地はヤマモモと苔たっぷりで、
　紅い頬して地表を覆う
――笑窪浮かべてまどろんで、
　浜じゃ波が打ち寄せては死んでいくなど、知るよしもなし。

マルディブ鮫

鮫って奴は、
マルディブ海にいなさる粘液質の青白きばか、
だってのに、スリムな青ぴかのパイロット・フィッシュ殿は
いそいそお世話をやいてはさ、
木挽き穴みたいな大口や、納骨堂の胃袋にも
たじろがず、
恐ろしき脇腹にへばり付き
ゴルゴン顔の前をするりと通る、
ときには鋸歯にお泊まりだ
危険とみれば
上下三列白光りする地獄の門に逃げ込む。
運命の女神のあぎとに隠れるよ！
パイロット・フィッシュ殿は、ご親切にも鮫を餌食までご案内、
だのにご自分は召し上がらぬ―
パイロット・フィッシュ殿は、ぼんやり女の、ぞっとする肉を貪る蒼白き魔女の
眼球にして脳髄なり。

船首像

チャールズとエマ号はいそいそと船出、
（舳先に彫られたカップルの名前をとった船）
巻き毛の男は元気一杯、
女は花嫁らしく男をからかうよう。
　すてきな船首で出航だ！

さはあれど、鉄錆び明礬こびりつき
舵すりむき風雨に晒され

少年少女は辛かったはず、それでも陽気、
目には涙、塩辛い涙をたっぷり浮かべているが。
　接着剤取れかかり、抱擁ゆるむ。

結局、薄暗き夜ともなれば
軋む梁　呻く肋材、
風下の暗き岸、白き波頭。
お二人は　珊瑚礁に倒れこむ。
　せめて防波堤の波よ波、躍ってやってくれ、風唸ろうと。

――◇――◇――◇――

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）晩年の詩集『ジョン・マー』（*John Marr and Other Sailors*, 1888）より、明るいトーンのもの“ To Ned ”, “ Tom Deadlight ”, “ The Enviable Isles ”, “ The Maldive Shark ”, “ The Figure-Head ” を抄訳。出典は、Melville, Herman. Douglas Robillard（ed）*The Poems of Herman Melville.*（Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2000）